風速の嘆きの霧

風速の海

天平八年（七三六）六月に難波を出航した遣新羅使人の一行は、瀬戸内海の各港を経由しながら新羅へ向かったと考えられます。その途中で、風速浦に寄港したことが伝えられています。

わが故に　妹嘆くらし　風速の　浦の沖辺に　霧たなびけり
（巻十五―三六一五）

沖つ風　いたく吹きせば　吾妹子が嘆きの霧に　飽かましものを
（巻十五―三六一六）

いずれも「風速の浦に船泊せし夜に作れる歌」であり、風速浦の沖に霧が立ちなびいていることから、私のために妻が嘆いているらしいと考え、沖からの風が強く吹いてきたなら、その「嘆きの霧」に存分に包まれるものを、と詠んでいます。沖の方にだけ立った夜霧を眺めながら、家に残してきた妻の嘆く息であるあの霧に触れたいのに、と海上の霧に近づくことができない現実を悲しんでいるようです。

「風速」とは、現在の広島県東広島市安芸津町風速の地とされています。穏やかな内海に面した場所で、視界の先には四国が横たわり、その手前に大小の島々が浮かんでいます。「霧」といえば秋のイメージが強くありますが、現代の気象学によれば霧にもいくつかの種類があり、発生時期も異なるようです。この地域では、春から夏にかけてよく海霧が発生するということです。

『万葉集』で「たなびく」と表現されるのは「霞」や「雲」が圧倒的に多く、「霧」と「煙」の例も若干あります。気象用語では、「霧」と「雲」は地面に接しているかいないかで区別されるそうです。他方で、万葉歌にも詠まれた「霞」は、気象用語にはありません。いわゆる季語では、春の霞、秋の霧、と季節によって明確な使い分けがなされますが、万葉歌では春の霧も秋の霞も詠まれています。当時はまだ季語が確立していなかったといわれる理由の一つです。

「嘆きの霧」を詠む歌は、山上憶良の「日本挽歌」（巻五―七九九）と、同じ遣新羅使人歌群の三五八〇・三五八一番歌にもみられます。いずれも、恋人と離ればなれになった嘆きが、美しい情景として表現されています。

（万葉文化館主任研究員・井上さやか）